

環境対応、高齢化社会がキーワード
 飲料、食品用途を中心とした容器、包装の国内市場を調査

2018年予測(2013年比)

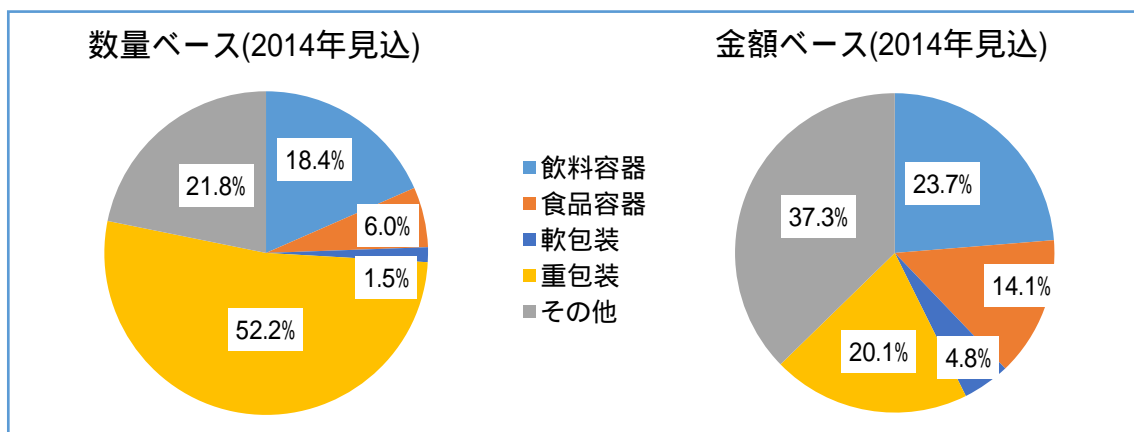
PLA食品容器・包装 19.3億円 (32.2%増) 環境負荷軽減でCVSやスーパーで採用増加
 透明飲料カップ 110億円 (18.3%増) アイス用CVSカウンターコーヒーで拡大

マーケティング&コンサルテーションの(株)富士キメラ総研(東京都中央区日本橋小伝馬町 社長 田中 一志 03-3664-5839)は、飲料や食品を筆頭に物品の輸送・保管・販売などに不可欠な容器、包装とそれに使用される材料の国内市場を調査し、その結果を報告書「2014年 パッケージングマテリアルの現状と将来展望」にまとめた。

この報告書では、飲料容器、食品容器、パウチなどの軟包装、軟包装用フィルム、医療包装、段ボールなどの重包装、その他包材、緩衝材や粘着テープ・ラベルなどの関連資材の計56品目について、今後の方向性を明らかにした。

< 調査結果の概要 >

	2014年見込	2018年予測	13年比
数量	1,692万トン	1,698万トン	100.7%
金額	4兆4,824億円	4兆5,068億円	101.4%



国内生産、国内消費が基本となる容器、包装市場は、人口減少や国内の製造業の空洞化などの厳しい環境下ながらも、核家族化や単身世帯の増加によって個包装化が進み、拡大してきた。2014年は、数量ベースでは容器の軽量化、包装の薄肉化の影響で前年比0.3%増と伸び悩むものの、原材料などのコストアップによる値上げなどから、金額ベースでは前年比0.8%増が見込まれる。

飲料容器は金額ベースで最も構成比が高い。缶やびんの需要が減少しPETボトルの需要が増加している。PETボトル市場は拡大するものの、缶やびんの縮小により金額ベースでは横ばい、数量ベースでは缶やびんと比較しPETボトルは軽量であることから縮小が予測される。

食品容器はCVSでの弁当や惣菜の需要増加があるものの、容器の軽量化が進んでおり市場はほぼ横ばいである。耐熱容器など機能性の高い容器への需要シフトが進んでいる。

ラップフィルムやパウチなどの軟包装は市場が小さいものの、最も成長率が高い。レトルトパウチやスタンディングパウチなどパウチ類は廃棄のしやすさから、びんや缶からの採用切り替えが進んでおり、市場も拡大している。また、用途は食品が中心であるが、トイレタリー分野でも詰め替え用などで安定的な需要がある。

段ボールなどの重包装は、数量ベースで最も構成比が高い。2020年の東京五輪に向け、景気の回復や

物流量の増加に伴う拡大が期待される。

今後は、環境対応や高齢化社会などをキーワードに新たなビジネスチャンスが期待され、2018年には2013年比0.7%増の1,698万トン、同1.4%増の4兆5,068億円が予測される。

環境対応としては、容器の軽量化やバイオマス由来の容器の採用などが進んでいる。容器の軽量化はコストダウンにつながるため需要が高く、飲料容器でのびんや缶からPETボトルへの移行、食品容器では発泡品の拡大など様々な容器で進展している。バイオマス由来の原料を使用したPLA食品容器・包装の採用の他、PETボトルや食品容器での既存樹脂とバイオプラスチックの混合使用も進みつつある。

高齢化社会の進展により調理を簡素化できるレンジ対応ニーズが高まるとみられ、容器の耐熱化などが進んでいる。特に発泡PP/PS容器、電子レンジ対応パウチなどの拡大が期待される。

< 注目市場 >

1. PETボトル

	2014年見込	2018年予測	13年比
数量	67.1万トン	73.5万トン	112.4%
金額	2,440億円	2,680億円	112.7%

PETボトルは、ボトル、キャップ、ラベルで構成されるがボトルのみを対象とする。

市場の中心は清涼飲料用途であり、景気や気候などの影響を受けやすいため、短期的には縮小も想定されるが、飲料市場は微増で推移していることから、PETボトルもこれに連動し拡大するとみられる。また、調味料などでもびんやほかの素材からPETボトルへのシフトが続いていることから、2018年には2013年比12.7%増の2,680億円が予測される。

2. 透明飲料カップ

	2014年見込	2018年予測	13年比
数量	13.0億個	14.5億個	120.8%
金額	100億円	110億円	118.3%

プラスチック透明飲料カップを対象とし、チルド飲料用カップは対象外とする。ファストフードやコーヒーショップのテイクアウト用容器として採用されており、アイス用が中心である。

2013年はCVSのカウンターコーヒー向けが大きく拡大し、前年比二桁増となった。2014年は二桁増とまではいかないものの、前年比7.5%増となり市場も100億円に達すると見込まれる。ファストフード向けが減少しているが、CVSカウンターコーヒーが缶コーヒーやチルドカップ飲料など、他の容器で展開されるコーヒーの需要を取り込んでいる。また、カウンターコーヒーへの参入企業も増加していることから、今後も拡大が予測される。

3. 発泡PP/PS食品容器

	2014年見込	2018年予測	13年比
数量	20,000トン	24,000トン	126.3%
金額	110億円	130億円	130.0%

発泡PP/PS食品容器は、発泡体にすることで高い断熱性と軽量化を可能とした容器である。

電子レンジ対応の弁当容器や惣菜容器などに採用されている。また、断熱性の高さから、高齢化社会で市場拡大が予想され、保温ニーズのある弁当宅配での需要も期待される。

4. PLA食品容器・包装

	2014年見込	2018年予測	13年比
数量	4,050トン	5,300トン	135.9%
金額	15.1億円	19.3億円	132.2%

PLA(ポリ乳酸)はバイオマス(トウモロコシなどの植物)を原材料としたプラスチックで、バイオプラスチックの中で最も主流のものである。

バイオプラスチックは温室効果ガス削減や枯渇の恐れがある化石燃料の使用抑制など、環境負荷軽減に貢献する素材として注目度が高い。石油由来のプラスチックと比較すると市場は小さいが、潜在的な需要は大

きく、2018年には2013年比32.2%増の19.3億円が予測される。

耐熱性を必要としないサラダやフルーツを盛る透明容器、透明カップではCVSや大手スーパーなどで浸透しつつある。PLAは薄いフィルムへの加工、耐熱性の付与、コストなどの課題があるが、シュリンクフィルムや耐熱性を向上させる添加剤などの開発も進んでおり、徐々に克服されつつある。

< 調査対象 >

飲料容器	PETボトル、金属缶、ガラスびん、飲料カートン、チルド飲料用カップ、透明飲料カップ
食品容器	PET系食品容器、PPフィルター食品容器、PPシート食品容器、発泡PP/PS食品容器、PP/PSインジェクション食品容器、PSP食品容器、OPS食品容器、HIPS食品容器、PLA食品容器・包装、無菌包装米飯容器、紙カップ
軟包装	レトルトパウチ、スタンディングパウチ、スパウトパウチ、電子レンジ対応パウチ、ラミネートチューブ、ラップフィルム(小巻)、ラップフィルム(業務用)、シュリンクフィルム、ラベル用シュリンクフィルム、高機能鮮度保持フィルム
軟包装用フィルム	バイオ・生分解性樹脂包装、吸湿フィルム、バリアフィルム、その他軟包装フィルム
医療包装	PTP包装、分包・SP、輸液バッグ、バイアル
重包装	段ボール、プラスチック段ボール、プラスチックコンテナ、プラスチックパレット、PEパレットストレッチフィルム、バッグインボックス、PE重袋、フレキシブルコンテナ、バルクライナー
その他包材	静電シールドバッグ、エンボスキャリアテープ、ICトレイ、エアゾール缶、紙器(食品)、紙器(非食品)、パルプモールド容器
関連資材	粘着ラベル・テープ、紙管・プラコア、緩衝材、チャックテープ、包材用接着性樹脂

< 調査方法 >

富士キメラ総研専門調査員によるヒアリング及び関連文献、データベース活用による調査・分析

< 調査期間 >

2014年4月～7月

以上

資料タイトル	「2014年 パッケージングマテリアルの現状と将来展望」
体裁	A4判 375頁
価格	97,000円+税 CD-ROM付価格 107,000円+税
調査・編集	株式会社 富士キメラ総研 研究開発本部 第二研究開発部門 TEL:03-3664-5839 FAX:03-3661-1414
発行所	株式会社 富士キメラ総研 〒103-0001 東京都中央区日本橋小伝馬町12-5 小伝馬町YSビル TEL:03-3664-5839(代) FAX:03-3661-1414 e-mail:info@fcr.co.jp この情報はホームページでもご覧いただけます。 URL: http://www.group.fuji-keizai.co.jp/ http://www.fcr.co.jp/